

18 世紀フランス・フリーメイソン団の 植民地ネットワーク ーボルドーの事例からー

田 瀬 望

はじめに

フリーメイソン団 Freemasonry は、中世の石工の職能団体を継承ないしは借用して 17 世紀イングランドやスコットランドで組織された秘密友愛団であり、政治的中立と宗教的寛容を原則とする。活動の基礎単位は、会所 Lodge と呼ばれる会合場所と規則とを共有する会員組織である¹。各会所の活動は、設立された時代や地域、構成員の性格に応じて異なるが、共通するのは加入儀礼の執行、会員間の相互扶助と宴会、慈善である²。ブリテン諸島に出現した会所という社交形態は、1720 年代以降メイソン（会所で加入儀礼を受けた会員）が移動することで大陸ヨーロッパと植民地へと伝播し、国際ネットワークを形成していく³。筆者が研究対象とするフランス王国では 1720 年代半ばから革命まで 600 から 800 の

* 本稿は 2022 年に出版されたフランス語論文集に寄稿した論文に加筆と修正を施したものである。Nozomu Tase, « La franc-maçonnerie bordelaise et le monde colonial au XVIII^e siècle », dans Éric Saunier (dir.), *La Franc-maçonnerie dans les colonies. De l'Atlantique à la mer de Chine (XVIII^e-XX^e siècle)*, Paris, Maisonneuve & Larose / Hémisphères, 2022, p. 21-39.

¹ フリーメイソン団の基本思想と組織編成およびメイソン関連用語の訳については、深沢克己による一連の業績と訳書を参照している。深沢克己「一八世紀フランスのフリーメイソンと寛容思想」深沢克己・高山博編『信仰と他者－寛容と不寛容のヨーロッパ宗教社会史－』東京大学出版会、2006 年、223～259 頁；ビエール＝イヴ・ボルペール『啓蒙の世紀』のフリーメイソン』深沢克己編訳、山川出版社、2009 年。

² 一部の会所は、道徳的修行や知的活動を重視し、メイソン団の象徴体系と教理問答の学習にとどまらず、学問や芸術の愛好や研究に従事することもある。

³ メイソン団の国際伝播については、Pierre-Yves Beaurepaire, *L'Europe des francs-maçons. XVIII^e-XX^e siècles*, Paris, 2002, chapitre 1 を参照。

会所が設立され、さまざまな身分や職業から成る 5 万から 10 万の会員が存在したといわれる。フランス領植民地においても 1730 年代から 1740 年代にかけて会所が導入され、18 世紀後半には砂糖とコーヒーの生産拠点であったアンティル諸島を中心に、本国出身者またはクレオールのエリートを中心とする社交空間として定着した⁴。

本稿では、こうしたヨーロッパから植民地へのフリーメイソン団の拡大とその意義を理解するための基礎的作業として、ボルドーとアンティル諸島とを結ぶネットワーク形成の過程を検討する。ボルドーは、フランス王国南西部に位置するガロンヌ川の河口内港で、18 世紀に豊かな後背地と排他制の恩恵を受けてアンティル諸島植民地産品の中継貿易港として急速に成長した⁵。ボルドーはメイソン活動の国際的中心にもなり、18 世紀を通して 22 の会所が設立され、外国出身者やプロテスタントを含む卸売商や船長、高等法院の評定官や弁護士を中心に、小教区教会の主任司祭や修道士も含む 2000 名を超える男性が加入した⁶。

18 世紀フランスのフリーメイソン団に関する学術的研究は 1960 年代以降進展したが、その関心が長らく革命の起源問題に集中していたこともあり、植民地メイソン研究の基礎が築かれたのは革命 200 周年後のことである⁷。1993 年にエリザベト・エスカルとマリエル・グイヨン＝ギヨームが、第二次世界大戦後にフランス国立図書館で公開されたメイソン文書を網羅的に渉猟して、1770 年から 1850

⁴ 18 世紀を通してサン＝ドマングに 21 会所、グアドループに 13 会所、マルティニクに 9 会所が設立されている。Elisabeth Escalle et Mariel Gouyon-Guillaume, *Francs-maçons des loges françaises aux Amériques 1770-1850. Contribution à l'étude de la société créole*, Paris, BnF, 1993, p. 28-173.

⁵ Paul Butel, *Les négociants bordelais, l'Europe et les Iles au XVIII^e siècle*, Paris, Aubier, 1974. 排他制 Exclusif については、Jean Tarrade, *Le commerce colonial de la France à la fin de l'Ancien Régime. L'évolution du régime de l'exclusif de 1763 à 1789*, 2 vol., Paris, PUF, 1972.

⁶ Michel Figeac, *Destins de la noblesse bordelaise (1770-1830)*, 2 vol., Talence, Fédération historique du Sud-Ouest, 1996, t. 1, p. 277-278.

⁷ 例外としては、Alain Le Bihan, *Les francs-maçons parisiens du Grand Orient de France fin du XVIII^e siècle*, Paris, Éditions de la Bibliothèque nationale, 1966, rééd., Paris, Éditions du CTHS, 1990, p. 383-407 ; Id., « La franc-maçonnerie dans les colonies françaises du XVIII^e siècle », *Annales historiques de la Révolution française*, n°215, 1974, p. 39-62.

18世紀フランス・フリーメイソン団の植民地ネットワークーボルドーの事例から― 田瀬 望

年までの南北アメリカ大陸とカリブ海諸島におけるフランス系会所の一覧、加入者の名簿と身分・職業統計を作成している⁸。この仕事は近年の植民地メイソン研究の基礎をなし、第一に参照すべきものである。

1990年代末以降、地方研究の進展と現代社会の変化を背景として、メイソン研究においても植民地への関心が高まっている。エリック・ソニエは1998年にノルマンディ地方に関する浩瀚な博士論文を出版したのち、奴隷貿易港ル・アーヴルの研究を発展させ、奴隷貿易関係者の会所加入や革命期の植民地ロビーとメイソン人脈の重層を指摘しながら、奴隷制廃止への反対運動の持続性を理解するために会所が果たした機能を解明するという研究課題を提示している⁹。こうした問題提起は、フランス社会や歴史学界における植民地主義や奴隷制の過去への関心と呼応するものであり、実際に2000年代以降、グアドループやフランス島（現モーリシャス）といった植民地メイソン団を主題とする修士論文や博士論文が提出され始めている¹⁰。これらの研究では、パリを中心とする本国史の文脈では革命

⁸ Escalle et Gouyon-Guillaume, *Francs-maçons des loges françaises aux Amériques 1770-1850*, op. cit.

⁹ Éric Saunier, *Révolution et sociabilité en Normandie au tournant des XVIII^e et XIX^e siècles. 6 000 francs-maçons de 1740 à 1830*, Mont-Saint-Aignan, Publications des universités de Rouen et du Havre, 1998 ; Id., « Les négriers et la franc-maçonnerie. Les pratiques culturelles dans un port de traite, Le Havre, à la fin du XVIII^e siècle », dans Marcel Dorigny (dir.), *Esclavage, résistances et abolitions*, Paris, Éditions du CTHS, 1999, p. 139-151 ; Id., « L'espace caribéen : un enjeu de pouvoir pour la franc-maçonnerie française », *REHMLAC*, vol. 1, n° 1, 2009, p. 43-56. ソニエは2010年に「港町におけるフリーメイソン団」、2021年に「植民地におけるメイソン団」を主題とする研究集会を組織している。Cécile Révauger et Éric Saunier (dir.), *La franc-maçonnerie dans les ports*, Pessac, Presses universitaires de Bordeaux, 2012 ; Éric Saunier (dir.), *La franc-maçonnerie dans les colonies. De l'Atlantique à la mer de Chine (XVIII^e-XX^e siècle)*, Paris, Maisonneuve & Larose / hémisphères, 2022.

¹⁰ Chloé Duflo-Ciccotelli, *La franc-maçonnerie en Guadeloupe, miroir d'une société coloniale en tensions (1770-1848)*, Pessac, Presses universitaires de Bordeaux, 2021 ; Sandra Danielle Brinda Venkaya-Reichert, *La franc-maçonnerie à l'île Maurice de 1778 à 1915. Entre influences françaises et britanniques, la construction d'une identité mauricienne*, thèse soutenue à l'Université Bordeaux Montaigne, 2017. 英領インド植民地についても専門研究が公刊されている。Jessica Harland-Jacobs, *Builders of Empire: Freemasonry and British Imperialism, 1717-1927*, Chapel Hill, University of North Carolina Press, 2007 ; Simon Deschamps, *Sociabilité maçonnique et pouvoir colonial dans l'Inde britannique (1730-1921)*, Pessac, Presses universitaires de Bordeaux, 2019.

前夜から七月王政期にかけて奴隷貿易廃止や反奴隷制の世論を準備した博愛主義者のネットワークの一部とみなされることもある会所が¹¹、植民地貿易の展開や白人エリートによる植民地支配体制の形成に寄与していたことが示唆されている¹²。

このように植民地メイソン研究には植民地貿易史や帝国史の問題群に貢献できる可能性があるが、本国研究以上に史料の質と量に起因する障壁が存在する。エスカルとグイヨン＝ギヨームを始めとする先行研究が依拠してきた史料は、フランス国立図書館所蔵のメイソン文書に含まれるFM²である。ここには各都市の会所からパリの統轄団体フランス大東方会 Grand Orient de France (1771年から1773年の組織改編以前はフランス大会所 Grande Loge de France) に送られた会員名簿と書簡とが収められている¹³。まず、会員名簿は、統轄団体に公認された会所が毎年聖ヨハネ祝祭日に行われる役職者選挙の後に大東方会への提出を義務づけられていたものである。この名簿からは会員の身分や職業、出身地、加入歴や年齢、役職などをある程度明らかにできるものの、他会所からの訪問者のような一時的な集会参加者については記されていない。次に書簡の内容は、主に会所の公認取得の手続きや、公認後に毎年納入を義務づけられていた献納金 *don gratuit* に関わる。会所によっては、内部分裂や近隣会所との対立に関する情報が含まれており、ローカルなメイソン界の状況を垣間見られることもある。ただしFM²の分析では視野が地方と中央の關係に制限されがちである。それゆえ、会所が日常的な活動においては大きな自律性を保持しており、統轄団体を媒介せずに

¹¹ Catherine Duprat, *Pour l'amour de l'humanité. Le temps des philanthropes*, t. 1. *La philanthropie parisienne des Lumières à la Monarchie de Juillet*, Paris, Éditions du CTHS, 1993.

¹² グアドループの事例が示すように、会所内部では肌の色の序列にもとづく植民地社会秩序が再生産されており、「混血」や有色人が排除されていた。こうした有色人排除が一部の会所による異議申し立てと論争の対象となるのは、1835年から1847年にかけてのことである。Duflo-Ciccotelli, *La franc-maçonnerie en Guadeloupe*, *op. cit.*

¹³ フランス大東方会は、1728年頃にパリで設立されたフランス大会所 Grande Loge de France の改革から1773年に発足し、革命前夜には本国と植民地の大多数の会所を傘下に置いた。大東方会は、保持していた18世紀から20世紀の文書を1945年にフランス国立図書館に寄贈した。メイソン文書 fonds maçonnique はFM¹からFM⁵に分類されている。FM¹は統轄団体内部の部局や委員会に関わる記録、FM³は個別会所の集会記録、FM⁴は儀礼や位階に関連する文書、FM⁵は会所公認状や個人免状である。

訪問や文通のネットワークを編成していたという事実を十分に捉えられない。

こうした史料の特徴や限界を踏まえたうえで、本稿では本国から植民地へのフリーメイソン団の伝播と定着を理解するために、植民地メイソン団研究ではほとんど用いられていない新史料群に着目する。具体的には、パリのメイソン統轄団体の図書館で 2001 年末に公開された「ロシア文書」と、2016 年にベラルーシ国立図書館にて発見された「ミンスク文書」である¹⁴。実は、これらの史料群には植民地会所に直接由来する文書は、あまり含まれていない。だが、上述した国立図書館所蔵の史料と比べると、国内の各都市に設立された個別会所が保持していた文書が豊富に残存している。その中でも会所の集会記録簿と、統轄団体を経由しない会所間の文通が注目に値する。ボルドーで 1732 年に設立された会所「イギリス」*Anglaise* については、18 世紀の集会記録だけで 10 点も存在しており¹⁵、この数は同時期の会所のなかで例外的に恵まれている。これらの史料に依拠することで、本国の統括団体との連絡書簡だけでは十分に接近することのできなかつ

¹⁴ 「ロシア文書」Archives russes は、ヴィシー時代にフランスで押収されドイツ軍により国外へと持ち出されたメイソン文書で、第二次世界大戦末期に赤軍に奪われてモスクワの国家中央特別文書館で長らく保存されていた。ソ連崩壊後の返還交渉を経て、パリのフランス大東方会とフランス大会所で公開されることになった。「ミンスク文書」Archives de Minsk もヴィシー政権期に押収され国外に持ち出された文書の一部であるが、フランスには返還されていない。Pierre Mollier, « Le voile levé sur les archives « secrètes » de la franc-maçonnerie », dans Sébastien Laurent (dir.), *Archives « secrètes », secrets d'archives? Historiens et archivistes face aux archives sensibles*, Paris, CNRS Éditions, 2003, p. 123-132 ; Anatole Steburaka, « Les fonds français de Minsk. Les archives confisquées par les nazis durant la Seconde Guerre mondiale et conservées en Biélorussie », *Bulletin des bibliothèques de France*, n° 10, 2016, p. 82-88.

¹⁵ National Library of Belarus (以下 NLB と略記する), Boîte 091-85, livre d'architecture de l'*Anglaise* du 27 avril 1732 au 13 mai 1755 ; Bibliothèque de la Grande Loge de France (BGLDF), AR 112-4, 37, livre d'architecture de l'*Anglaise* du 24 juin 1755 au 4 août 1769 ; Bibliothèque du Grand Orient de France, Archives de la réserve 113-2 (BGODF, AR 113-2), 95, livre des délibérations pour les loges de compagnons du 6 mars 1781 au 11 avril 1793 ; 97, registre des délibérations pour les loges de banquet du 13 janvier 1781 au 27 septembre 1796 ; 98, registre des délibérations pour les loges de discipline du 7 octobre 1781 au 7 janvier 1797 ; 99, registre des délibérations pour les loges de maîtres du 16 septembre 1781 au 23 février 1797 ; 101, livre d'architecture du 17 juin 1784 au 28 août 1788 ; 102, livre d'architecture du 21 août 1788 au 10 novembre 1795 ; 103, livre des délibérations pour les loges d'apprenti du 13 novembre 1795 au 13 décembre 1803 ; 104, registre des délibérations pour les loges de compagnon du 13 juin 1796 au 22 juin 1804 ; 105, registre des délibérations pour les loges de maître du 9 mars 1797 au 3 avril 1823.

た、本国と植民地を結ぶメイソン・ネットワークの形成と革命期における再編成の過程の一端を辿ることができる。以下、本稿ではボルドーと植民地との関係の基礎となった植民地貿易関係者のメイソン団加入を確認したうえで、ボルドーの会所が受容した植民地からの訪問者の時間的推移と地理的分布を分析する。

第1節 「イギリス」会所における植民地貿易関係者

フランス王国の国際商業港に設立された会所は、地元実業界への参入と人脈形成の場として機能したのみならず、広域的な商業ネットワークの形成や維持に貢献していた¹⁶。1717年4月の開封王書により植民地貿易の指定港の一つとして認められたボルドーには、18世紀を通して植民地貿易やプランテーション経営に直接または間接に関与する者が存在し、アンティル諸島との間に強い結びつきを形成していた。よく知られているように、ボルドーでは1746年に設立された「友情」Amitié会所が、植民地への船舶艀装や植民地産品のヨーロッパへの再輸出により富裕化した卸売商や船舶艀装業者を集める最上流社交空間となっていた¹⁷。しかし、「友情」については新史料に限らず残存している史料は少ない。そこで本節では新史料に含まれる「イギリス」会所の集会記録簿と会員名簿から確認できる植民地貿易関係者と植民地出身者を紹介したい¹⁸。

新会員の受け入れには現会員の推薦が必要であったため、初期の会員構成は、創立者の職業上の人脈や家族・友人関係に規定される傾向にあった。ブリテン諸島出身の船乗りが寄港中に設立した「イギリス」会所では、ボルドーに進出したアイルランド系商人が1760年代まで役職者を輩出し続け運営の中核を担ってい

¹⁶ この点については、レヴァント貿易港マルセイユの「スコットランド聖ヨハネ」Saint-Jean d'Écosse 会所の事例が示唆的である。この会所はプロテスタント卸売商を集め、地中海沿岸に位置する諸港に子会所 loge-fille のネットワークを編成していた。Pierre-Yves Beaurepaire, *L'Autre et le Frère, L'étranger et la franc-maçonnerie en France au XVIII^e siècle*, Paris, Honoré Champion, 1998, p. 369-397.

¹⁷ Beaurepaire, *L'Autre et le Frère*, op. cit., p. 272-289.

¹⁸ 最初期の集会記録簿と会員名簿は、俗人界での身分・職業を含んでいないことが多く、身元の特定が難しいため、筆者は現時点では統計的な分析をできていない。

18世紀フランス・フリーメイソン団の植民地ネットワークーボルドーの事例から― 田瀬 望
た¹⁹。アイルランド系商人は、アンティル諸島植民地での需要が高まっていたア
イルランド産の塩漬肉や獣脂の販売と、フランス南西部産のブドウ酒や蒸留酒の
ブリテン諸島への輸出に従事していた²⁰。とはいえ、ペイルのカトリック貴族出
身で1730年代末にボルドーに到着したジャン・ビルンのように、植民地貿易船
の艀装に参入した者も加入している²¹。「イギリス」会所は1740年頃から地元実
業界の構成員にも門戸を開いていたが、1770年代後半にはボルドー出身の卸売
商や船長を中核とする社交空間に変容した。その中心にいたのは、1755年に加
入し1780年代から1790年代にかけて会所長を歴任したブノワ・シク・サン＝ブ
リである。彼は、船長として奴隷貿易に従事したのちに卸売商を名乗り、海上保
険業を展開していた人物である²²。

「イギリス」会所の集会記録簿のなかで植民地出身だと明記されている会員は、
5名にすぎない。その内訳は1740年代末のマルティニク1名とグアドループ2名、
1787年のサン＝ドマング2名である²³。こうした植民地からの来訪者の目的は、
ボルドー滞在中に加入儀礼を受けて会所の発行するメイソン身分証を得ることに
あったと考えられる。事実、サン＝ドマングのプランターが加入儀礼を受けた直
後にパリに出発予定であったように、彼らが「イギリス」の集会に継続的に参加
することはなかった²⁴。メイソン団加入者は、所属会所や統轄団体が発行した身
分証を旅先の会所で提示し、正規会員であると認められると集会に受け入れられ、

¹⁹ Beaurepaire, *L'Autre et le Frère. op. cit.*, p. 233-236.

²⁰ Louis M. Cullen, « The Irish Merchant Communities of Bordeaux, La Rochelle and Cognac in the Eighteenth Century », dans L. M. Cullen et Paul Butel (dir.), *Négoce et Industrie en France et en Irlande aux XVIII^e et XIX^e siècles*, actes du Colloque franco-irlandais d'histoire, Bordeaux, mai 1978, Paris, CNRS Editions, 1980, p. 51-63.

²¹ アイルランド・カトリック移民については、Patrick Clarke de Dromantin, *Les réfugiés jacobites dans la France du XVIII^e siècle. L'exode de toute une noblesse pour cause de religion*, Pessac, Presses universitaires de Bordeaux, 2005.

²² Philippe Gardey, *Négociants et marchands de Bordeaux. De la guerre d'Amérique à la Restauration (1780-1830)*, Paris, Presses universitaires Paris-Sorbonne, 2009, p. 44-45 ; Éric Saugera, *Bordeaux, port négrier. Chronologie, économie, idéologie, XVIII^e-XIX^e siècles*, Paris, Karthala, 1995, p. 355.

²³ この5名の他に1750年にサン＝ドマングのクレオール の推薦が承認されているが、本人は加入儀礼を受けるために会所に訪れることはなかった。

²⁴ もう1名は、すでにカップ・フランセの「真理」Vérité 会所の会員であった。

宴会で歓迎されたり、旅費の支援を受けたり、他の会所への紹介状を得られたりした²⁵。こうした訪問者の歓待と扶助はメイソン団が掲げる友愛の理念の主要な実践形態であり、コスモポリタンなメイソン界への帰属を実感する機会であった。受け入れ側にとっては、訪問者の歓迎は遠方の会所との交流の契機となるため、ネットワーク編成においても重要であった。次節では、こうした観点からボルドーの「イギリス」会所が18世紀に受け入れた訪問者を検討しよう。

第2節 「イギリス」会所への植民地からの訪問者

「イギリス」会所の正規会員には植民地出身者はほとんど存在しなかったが、集会記録には植民地からの訪問者として記録されたメイソンが39名登場する(表1・表2)。

【表1】ボルドー「イギリス」会所への訪問者の数と「出身地」²⁶

地名 \ 年代	1740s	1750s	1760s	1780s	1790s	合計
グアドループ			2	3	2	7
サン＝クリストフ					1	1
サン＝ドマング		1	2	7	8	18
マルティニク	2	1		1	1	5
ニューイングランド			1			1
ニューファンドランド				1		1
ルイジアナ		1	1			2
フランス島					4	4
合計	2	3	6	12	16	39

²⁵ 「啓蒙の世紀」フランス王国の会所では、イスラム教徒やユダヤ教徒といった宗教的マイノリティのように、構成員が同輩とみなすことのできない者が拒否されることも珍しくなかった。Beaurepaire, *L'Autre et le Frère*, op. cit., p. 539-605.

²⁶ 「出身地」は、必ずしも出生地を意味せず、居住地や正規会員として所属する会所の所在地を含む。1758年と1760年のルイジアナからの訪問者はともにルシヨンという名で、同一人物の可能性もあるが、姓しか分からないため別人として計算している。また1796年3月と4月に訪問したデュフルについても、同一人物の可能性もあるが、出身地がそれぞれサン＝ドマングとフランス島と異なって記されているため、別人として数えている。

簿冊の形式で集会記録が残存していない1770年代を除くと、訪問者数は1740年代2名、1750年代3名、1760年代6名、1780年代12名、1790年代16名と推移する。これらの数字が示すように、ボルドーと植民地とを結ぶメイソン・ネットワークの形成が、七年戦争後から1780年代末にかけて著しく拡大した植民地貿易の発展のリズムと対応していたのは明らかである²⁷。実際、39名のうち31名がアンティル諸島からの来訪者で、その構成はサン＝ドマング16名、グアドループ7名、マルティニク5名、サン＝クリストフ1名である²⁸。残り8名のうち4名はルイジアナ、ニューファンドランド、ニューイングランドからの来訪者である²⁹。彼らがボルドーを訪れた動機は集会記録からは分らないが、これらの地域が生活必需品を自給できないアンティル諸島に対して食糧や材木、家畜を供給していた事実を指摘しておこう³⁰。ニューファンドランドについては、フランスが1713年のユトレヒト条約以降も北部・西部での漁業権を保持し続けており、タラは奴隷の食糧として重要であった。イギリス領北アメリカ植民地ニューイングランドについては、アメリカ独立戦争の前夜にフランス諸港との間に商業関係が限定的ながら築かれており、ボルドーの卸売商は、アンティル諸島経由でタバコの輸入および蒸留酒や塩等の輸出を試みていた³¹。

1790年代の訪問者数は1790年1名、1791年2名、1793年1名、1796年6名、1797年2名、1798年1名、1799年2名と推移するが、アンティル諸島からの訪問者が1792年から1795年にかけて確認されない。その要因としては、1793年から1802年まで続いたイギリスとの海上戦争、奴隷反乱を発端とするサン＝ド

²⁷ Tarrade, *Le commerce colonial de la France à la fin de l'Ancien Régime. op. cit.*, t. I, p. 33-39 ; Butel, *Les négociants bordelais. op. cit.*, p. 15-23.

²⁸ サン＝クリストフは、1625年以降フランス領であったが、1713年のユトレヒト条約によりイギリス領になった。

²⁹ ルイジアナは、1683年以降フランス領であったが、七年戦争後にスペインとイギリスに分割された。

³⁰ フランス領アンティル諸島と他のフランス領植民地や外国との貿易については、Tarrade, *Le commerce colonial de la France à la fin de l'Ancien Régime. op. cit.*, t. I, p. 41-42, 352-367, 386-390, 419, 439, t. II, p. 659-665, 705-712.

³¹ Butel, *Les négociants bordelais. op. cit.*, p. 44-46 ; Silvia Marzagalli, *Bordeaux et les États-Unis 1776-1815. Politique et stratégies négociantes dans la genèse d'un réseau commercial*, Genève, Droz, 2015, p. 29.

マンダの混乱、そして恐怖政治といった本国の状況が考えられる³²。6名と突出している1796年の訪問者数は、1795年4月から7月にかけてプロイセン、オランダ、スペイン、トスカナとの和平が締結され、第一次対仏大同盟が事実上崩壊し、アメリカ合衆国を始めとする中立国船のボルドー入港が増加した事実から説明されよう。1790年代前半にボルドーの卸売商・船舶偽装業者は、アンティル諸島との貿易を継続するために、北アメリカ諸港とアメリカ船への依存を強めるようになっていた³³。なお、1796年の訪問者にはサン＝ドマングからの避難民が含まれているが、この点については第4節で検討する。

1791年以降、フランス島（現モーリシャス）からの訪問者が4名登場した点については、ボルドー実業界のアジア貿易への参入を背景とする。長らくインド会社の独占下に置かれていたアジア貿易は、1769年から1785年にかけて民間に開放されたのち、財務総監カロヌによるインド会社の再建を経て、1790年4月に国民議会により自由化された³⁴。フランス島は18世紀前半からインド会社船のインドや中国への寄港地として利用されていたが、1787年5月27日にポール・ルイが、あらゆる外国船の停泊が可能な自由港として認められており、革命期にもその地位を剥奪されることはなかった。ボルドーの船舶偽装業者は、1767年7月と1784年8月の国王顧問会議裁決により排他制が緩和されたことで植民地貿易の競争が激化することを懸念して、アメリカ独立戦争末期以降アジア貿易への

³² 革命期ボルドーの商業活動については以下を参照した。Paul Butel, « Crise et mutation de l'activité économique à Bordeaux sous le Consulat et l'Empire », *Revue d'histoire moderne et contemporaine*, t. 17, n° 3, 1970, p. 540-558 ; Id., « Guerre et blocus sous la Révolution et l'Empire », dans *État, finances et économie pendant la Révolution française. Colloque tenue à Bercy les 12, 13, 14 octobre 1989 à l'occasion du Bicentenaire de la Révolution française*, Paris, Imprimerie nationale, 1991, p. 568-573 ; Silvia Marzagalli, « Ruine ou continuité du négoce bordelais ? », dans Michel Figeac (dir.), *Histoire des Bordelais*, t. I. *La modernité triomphante (1715-1815)*, Bordeaux, Mollat, 2002, p. 306-324。「イギリス」会所は、恐怖政治期の初期に「平等」と会所名を変えて活動し続けていたが、1794年7月から翌年3月までは活動を休止していた。

³³ Marzagalli, *Bordeaux et les Etats-Unis 1776-1815*, op. cit., p. 127-231.

³⁴ Jean Tarrade, « La Révolution et le commerce colonial : le régime de l'exclusif de 1789 à 1800 », dans *État, finances et économie pendant la Révolution française*, op. cit., p. 557-558.

18 世紀フランス・フリーメイソン団の植民地ネットワークーボルドーの事例から― 田瀬 望
参入を試みた。1780 年代後半にフランス島は、モザンビーク沿岸の奴隷貿易や
インド貿易の寄港地としてボルドーから出航する船の主要な目的地となるが、革
命期にはアンティル諸島よりも安定した取引を期待されて、より一層の重要性を
帯びることになった³⁵。こうした貿易の展開を反映して 1790 年代にはフランス島
とボルドーとの間で双方向的なメイソンの交流が展開していたことが史料から確
認される。1792 年 8 月に「イギリス」会所は会員 2 名がポール・ルイの会所を
訪問した際に受けた歓待への礼状を送付することを決定した³⁶。同会所は 1799 年
6 月にはポール・ルイの「三重希望」Triple Espérance 会所に属するラランクを
正規会員として受け入れている³⁷。

第 3 節 ボルドーのメイソン会所の植民地との文通

植民地からボルドーの会所への訪問者は、しばしば所属会所が訪問先に宛てた
書簡を保持していた。逆に受け入れ側が、訪問者に対して植民地宛ての書簡を委
ねることもあった。「啓蒙の世紀」のメイソンたちは文通の重要性を認識しており、
メイソン界の動向に関する情報を収集し他会所との友好関係を築くために通信網
を戦略的に構築していた³⁸。本節ではボルドーの会所が編成した文通網から植民
地との関係を確認したい。

「イギリス」会所の文通網はフランス南西部の後背地にあったこともあり、集

³⁵ Butel, *Les négociants bordelais, op. cit.*, p. 40-44 ; Id., « Le trafic colonial de Bordeaux, de la guerre d'Amérique à la Révolution », *Annales du Midi*, t. 79, n° 83, 1967, p. 295-297 ; Id., « Guerre et blocus sous la Révolution et l'Empire », art. cit., p. 574 ; Tarrade, *Le commerce colonial de la France à la fin de l'Ancien Régime, op. cit.*, t. II, p. 687-689. ポール・ルイには 1770 年代後半までに会所が設立されていた。Venkaya-Reichert, *La franc-maçonnerie à l'île Maurice de 1778 à 1915, op. cit.*, p. 39-49.

³⁶ BGODF, AR 113-2, 102, livre d'architecture de l'*Anglaise* du 21 août 1788 au 10 novembre 1795, fol. 133, 7 août 1792.

³⁷ BGODF, AR 113-2, 103, livre des délibérations de l'*Anglaise* pour les loges d'apprenti du 13 novembre 1795 au 13 décembre 1803, fol. 117, 20 juin 1799.

³⁸ こうした文通は、メイソンが個別会所や都市の境界を超えた「普遍的」共同体への帰属意識を涵養するのに貢献したと考えられている。Beaurepaire, *L'Autre et le Frère, op. cit.*, p. 65-93.

会記録には植民地会所との文通に関する言及はほぼない³⁹。1740年頃に設立された「フランス」Française 会所については、新史料群のなかに送受信した書簡の転写が部分的に残されており、植民地との文通を知ることができる。この会所には高等法院の評定官や弁護士といった地元のエリート層も所属していたが、卸売商や船舶艀装業者、船長が多数加入していた⁴⁰。

「フランス」は1768年から1771年にかけてはアンティル諸島の5会所と文通しており、その内訳はグアドループ2、マルティニク2、サン＝ドマング1である。1791年には、ポルト＝フランス（サン＝ドマング）とポール＝ルイ（フランス島）の各1会所と文通しており、前節で述べた東インド貿易への参入を反映している。植民地との文通は、国内とのそれよりも時間がかかり、船の難破や敵国船による拿捕による紛失のリスクもあった⁴¹。そのため、文通自体がメイソンの移動に依存していた側面もあった。「フランス」が受け取った1769年5月の書簡からは、ヴィルヴァロワというメイソンがボルドーとグアドループとを往来しながら会所間交流を成立させていた様子がうかがわれる⁴²。おそらくこうした郵便事情もあり、植民地会所との連絡は多くの場合、聖ヨハネ祝祭日（6月24日）の役職者選挙の後に行われる会員名簿の交換に限られていた。名簿の交換には会所間の友情関係の継続を確認するとともに、訪問者の受け入れを促進するという目的があった。

³⁹ 「イギリス」会所が18世紀に主に文通していたのは、アジャン、ベルジュラク、コニャック、リモージュ、ネラック、ペリグー、カルカソンヌ、トゥルーズ、モンブリエのような南仏の諸都市や、プレスト、ラ・ロシェル、ロシュフォルといった大西洋沿岸の港町である。

⁴⁰ 初期の「フランス」会所に関する史料は極めて少なく、会員構成の全体を再構成することは難しいが、1746年と1749年の会員名簿と「イギリス」会所の集会記録から一部の会員について知ることが可能である。1740年から1770年の「フランス」会所の構成員については、Nozomu Tase, *Construire l'espace maçonnique. Les loges bordelaises des Lumières au Premier Empire*, thèse soutenue à l'Université Côte d'Azur, 2019, p. 38-41, 593-601. なお、この会所は1762年頃から「スコットランド選良フランス」Française Éluée Écossaiseと称するようになる。

⁴¹ グアドループの会所がパリのフランス大東方会に宛てた書簡が受け取られるまでには、早くて2ヵ月かかり、1年以上かかる場合もあった。Dufo-Ciccotelli, *La franc-maçonnerie en Guadeloupe*, op. cit., p. 118-119.

⁴² ヴィルヴァロワはレ・ザビムの「良き友情」Bonne Amitié 会所を訪問した際、「フランス」宛ての書簡を託され、ボルドーに戻ると書簡を受け取った「フランス」からグアドループへの返信を委ねられた。BGODF, AR 113-2, 320, fol. 87, planche de la *Bonne Amitié* des Abymes de la Guadeloupe à la *Française* de Bordeaux, 2 mai 1769.

定期連絡を除いて、ボルドーと植民地の間で文通が活発化するの、植民地の会所によるパリの統轄団体への公認申請である。1728 年頃に設立されたフランス大会所は、当初パリの会所を主体とする連合体に過ぎず、地方への影響力は限定的であった。しかし 1760 年代初頭以降、大会所に属していない国内会所を非正規会所とみなし、パリへの加盟を促した⁴³。ボルドーでは 1765 年に大会所に加盟した「フランス」と「友情」が、パリに対して植民地メイソン会所の情報を提供すると同時に、植民地に対してパリへの加盟を促した⁴⁴。さらに、「友情」会所の役職者を歴任していた卸売商ジャック・アンペールは、1766 年 11 月のパリ滞在時にフランス大会所を訪問し、グアドループの「習俗の完成」Perfection des Mœurs 会所に対する公認を要請した⁴⁵。この働きかけが奏功して、同月 15 日付けで公認状が発行されることになった。植民地会所は、大会所が作成する正規会所名簿に登録されることで、自らの正規性を証明するとともに、本国の会所やメイソンとの交流が促進されることを期待できた。要するに、ボルドーの会所は、植民地の会所を本国のメイソン空間に接合する役割を果たしたのである。とはいえ、ボルドーやアンティル諸島のメイソンが編成していたネットワークは帝国の枠組みに限定されていなかった。次節では、こうした観点から革命期におけるサン＝ドマング島の白人避難民の動向に着目しながら、メイソン・ネットワークの環大西洋的な広がりを検討しよう。

第 4 節 ハイチ革命の衝撃とメイソン・ネットワークの再編

革命期におけるサン＝ドマング住民の島外への脱出は、革命の勃発からハイチ

⁴³ フランス大会所が公認した地方会所の数は 1744 年には 19 であったが、1765 年には 85 へと増加する。Gérard Gayot, *La franc-maçonnerie française. Textes et pratiques (XVIII^e-XIX^e siècles)*, Paris, Gallimard, 1991, p. 34. フランス大会所・フランス大東方会による国内会所統合の意思については、Beaurepaire, *L'Autre et le Frère*, op. cit., p. 153-212.

⁴⁴ BGODF, AR 113-1, 14, fol. 22, planche de l'*Amitié* de Bordeaux à la Grande Loge de France, 23 mai 1765 ; fol. 48, planche de Jacques Imbert vénérable de l'*Amitié* à Zambault, 4 janvier 1766 ; fol. 60-61, planche de Jacques Imbert vénérable de l'*Amitié* au substitut général du Grand Maître de la Grande Loge de France, 12 avril 1766.

⁴⁵ BGODF, AR 113-1, 14, fol. 93, planche de Jacques Imbert député de l'*Amitié* à Zambault, 22 novembre 1766.

共和国の成立まで続くことになるが、特に1793年6月にカップ・フランセで勃発したガルボー事件に続く奴隷反乱と火災、そして1802年から1803年のフランスの軍事的敗北が大規模な移動の契機となった⁴⁶。この間、3万を超える男女が、ジャマイカやキューバといった近隣の島々や、北アメリカ東岸やメキシコ湾の諸港に移動した。避難民の多くはサン＝ドマングへの帰還を期待ないしは計画していたこともあり、フランス本国の港へ向かった者は少なかった。それでもフランスの諸港には約1万人が到着したと考えられている。こうした避難民にはプランターや卸売商といった白人支配層だけではなく、「小白人」や有色自由人、黒人奴隷も含まれていた。

フィラデルフィア、ニューヨーク、ボルティモアといった北アメリカ諸港への大規模な移動が生じたが、これらの港には革命以前からフランス人コミュニティが存在し、サン＝ドマングとの間に家族・商業ネットワークが築かれていた。また革命期に北アメリカ諸港は、旧体制期以上にアンティル諸島への食糧供給の役割を果たすとともに⁴⁷、ボルドーを始めとするフランス諸港との通商関係を発展させたため、プランターや卸売商が本国への帰還や事業の継続を計画するうえで適した目的地であった。さらに、アメリカ合衆国では救済に値する白人避難者に対して、フランス系を中心とする住民や結社によるチャリティや、都市や州、連邦政府からの公的支援が展開されていた⁴⁸。

サン＝ドマングは18世紀カリブ海域のメイソン活動の一大中心地であったた

⁴⁶ 本節におけるサン＝ドマング避難民に関する記述は次の未刊行博士論文に依拠する。R. Darrel Meadows, *The Planters of Saint-Domingue, 1750-1804. Migration and Exile in the French Revolutionary Atlantic*, Ph.D. dissertation, Carnegie Mellon University, 2004.

⁴⁷ フランス領アンティル諸島植民地では、革命勃発後に本国からの穀物輸入が停滞したため、食糧供給を目的に主要な港市が外国船に開放された。イギリスとの海上戦争が勃発すると、国民公会は1793年2月19日の法令により植民地の港をアメリカ船に制限なく開放した。Tarrade, « La Révolution et le commerce colonial : le régime de l'exclusif de 1789 à 1800 », art. cit., p. 554-557, 562.

⁴⁸ アメリカ合衆国側の支援活動については、注46の文献に加えて以下も参照。天野由莉「アメリカ合衆国におけるサンドマング白人難民の受容－「感性」の働きと1793年における難民支援活動の考察－」『アメリカ太平洋研究』14巻、2014年、95～108頁。

18 世紀フランス・フリーメイソン団の植民地ネットワークーボルドーの事例から― 田瀬 望

め、避難民のなかにメイソンが含まれており⁴⁹、彼らの一部は移動先で会所という社交と相互扶助の枠組みを再建している。例えば、カップ・フランセの「真理」Vérité 会所に属していたメイソンの一部は、1797 年にボルティモアで会所を設立し、ボルドーの「友情」会所との文通を再開した⁵⁰。

こうしたサン＝ドマング避難民に対して、ボルドーの会所は大西洋の向こう岸の会所と同様に、サン＝ドマング避難民に対する支援を実施した⁵¹。ただし、それは「小白人」や黒人を含む避難民全般を対象とする慈善ではなく、あくまでも困窮した「兄弟」を対象とするメイソンの相互扶助であった。卸売商と船長を主要な構成員としていた会所は、避難民の書簡や出版物、新聞による報道を通じて反乱奴隷による白人に対する暴力への恐怖を共有し、財産を失った白人エリートの不運に共感していたと推察される⁵²。

ボルドーのメイソンが支援したのは、カップ・フランセから避難してきたモレールというメイソンである⁵³。「イギリス」会所が集会でモレールのための寄付を募るとともに、市内の他会所にも支援を呼びかけたのは、1795 年 12 月のことである。

⁴⁹ サン＝ドマングには 18 世紀に 21 会所と地方大会所 Grande Loge Provinciale が設立された。Escalle et Gouyon-Guillaume, *Francs-maçons des loges françaises aux Amériques 1770-1850*, op. cit., p. 106-173.

⁵⁰ BGODF, AR 113-2, 472, fol. 37, planche de la Vérité du Cap-Français séant à l'orient de Baltimore à l'Amitié de Bordeaux, 26 août 1797. ニューヨークとニューオーリンズにおけるサン＝ドマング避難民による会所の再建については、以下を参照。Marieke Polffiet, « Refuge et sociabilité politique : les francs-maçons dominicains aux États-Unis au début du XIX^e siècle », *La Révolution française*, n° 16, 2019, revue en ligne, consulté le 7 août 2025.

⁵¹ フランスに到着した避難民も、家族や親類の扶助に頼るとともに、政府に支援を陳情または申請した。フランスでは、1792 年 5 月 18 日、1793 年 11 月 28 日、1794 年 10 月 18 日、1794 年 12 月 27 日、1796 年 12 月 7 日、1797 年 8 月 13 日、1799 年 4 月 17 日に制定された一連の法により、本国に滞在するサン＝ドマング避難民に対する支援が実施された。Meadows, *The Planters of Saint-Domingue, 1750-1804*, op. cit., p. 185-199.

⁵² ボルティモアに亡命した卸売商ビエール・ランヌは、1793 年 7 月 30 日にボルドーの商社に宛てた書簡のなかで、カップ・フランセでは 6 月の火災と略奪によりほとんどすべての農地 propriétés が破壊され、白人人口の「半分」が虐殺されたと伝えている。Butel « Guerre et blocus », art. cit., p. 567.

⁵³ 集会記録には姓しか書かれていないが、1729 年にボルドーで生まれた卸売商ジョゼフ・モレールか、その家族かもしれない。ジョゼフ・モレールの名は、カップ・フランセ「真理」会所の会員名簿に 1771 年から 1788 年まで登場する。Escalle et Gouyon-Guillaume, *Francs-maçons des loges françaises aux Amériques 1770-1850*, op. cit., p. 690.

ちょうど第一次対仏大同盟が崩壊し、ボルドーへの中立国船の入港が増加し始めた時期にあたる。おそらくボルドーに到着したモレールが、「イギリス」会所のメイソンに支援を求めたのであろう。「イギリス」は1796年5月にも会所内で寄付を募り、2ルイ金貨と1000リーヴル（アシニャ）をモレールに与え、8月には彼を正規会員として受け入れている⁵⁴。他方、「イギリス」会所の呼びかけを受けた「統一フランス」Française de l'Unité会所も、1796年1月に400リーヴルを、5～6月には4リーヴルと3636リーヴル（アシニャ）を、翌年2月には36リーヴルと衣服をモレールに与えた⁵⁵。こうしたサン＝ドマング難民に対する支援は、ナポレオン時代まで続いたようである。革命前夜にボルドーで設立された「平和の本質」Essence de la Paix会所は、1801年4月にフランス大東方会に宛てた書簡のなかで「避難してきた入植者」colons déportésに対して日常的に支援を行っている⁵⁶と述べている。

おわりに

本稿では、18世紀におけるヨーロッパ植民地へのメイソン会所という社交形態の伝播を理解するために、アンティル諸島からボルドーの会所への訪問者に着目しながら、本国と植民地を結ぶネットワークの展開の過程を検討してきた。その結果、明らかになったのは、メイソン会所のネットワークの展開が商業網のそれと密接に連動していたことである。独立戦争から革命期にかけてボルドーとアメリカとを結ぶ新たな商業ネットワークの出現と発展の過程と要因を追究したシルヴィア・マルザガリによれば、近世の卸売商は、直接面識のある商人を取引相

⁵⁴ モレールは1800年から1802年にかけて会所の救護役 hospitalier を務めている。BGODF, AR 113-2, 103, livre des délibérations de l'Anglaise pour les loges d'apprenti du 13 novembre 1795 au 13 décembre 1803, fol. 43 v°, 9 août 1796.

⁵⁵ NLB, Boîte 091-152(H), registre des délibérations de la Française de l'Unité du 19 janvier 1794 au 23 décembre 1797. 1770年代後半に「フランス」会所の分裂から発足した「アキテーヌ・フランス」Française d'Aquitaine 会所が、恐怖政治期に「統一フランス」会所に改名していた。

⁵⁶ BNF, FM² 172, l'Essence de la Paix, orient de Bordeaux, fol. 43 v°, planche au Grand Orient de France, 2 avril 1801.

18 世紀フランス・フリーメイソン団の植民地ネットワークーボルドーの事例から― 田瀬 望

手や現地代理商として優先的に選んだという⁵⁷。こうした商取引のあり方を踏まえると、会所網が植民地貿易のリズムと対応しながら発展していたことがより良く理解されるだろう。とはいえ、本稿で主たる史料とした会所が残した集会記録簿や書簡からは、メイソン人脈が商業網の形成・維持・発展・変容にいかなる役割を果たしていたのかを論じることはできなかった。この課題に応えるためには、商業史研究で用いられている出入港記録や商人書簡、公証人文書といった史料群を再読し、商人や船長としての活動とメイソンとしての軌跡を交差させることが必要である。こうした作業を遂行することで、奴隷貿易や植民地体制に対する異議申し立てが始まる大西洋革命の時代において、白人が支配的な地位をいかにして維持しようとしていたのかについても、メイソン研究の立場から貢献できるかもしれない。

本稿では 1732 年から 19 世紀初頭までを時間的枠組みとして採用したが、ボルドーは、革命戦争とナポレオン戦争を経ることで、植民地産品の中継港としての地位を後退させていき、アンティル諸島産品は、中立国の船や港を介してヨーロッパに流入するようになる。こうしたなかでボルドーと植民地とを結ぶメイソンのネットワークの広がりや役割は、いかなる変化を経験するのだろうか。この点についての検討も今後の課題である。

【表 2】 ボルドー「イギリス」会所への植民地からの訪問者

姓	名	職業	所属会所	地域（都市）	訪問年月日
Artaud				グアドループ (パス＝テール)	1767 年 7 月 17 日
Belso			<i>Saint-François</i>	グアドループ (パス＝テール)	1788 年 2 月 7 日
Benoît			<i>Saint-Jean d'Écosse</i>	グアドループ (パス＝テール)	1796 年 12 月 22 日
Burck	Jean		<i>Loge n° 186</i>	ニューファンドランド	1786 年 2 月 24 日
Chastres				サン＝ドマング (カップ＝フランセ)	1789 年 6 月 21 日 1789 年 7 月 9 日
Delaferrière			<i>Unanimité et Union du Saint-Esprit</i>	サン＝ドマング (プチ＝ゴアヴ)	1789 年 7 月 9 日

⁵⁷ Marzagalli, *Bordeaux et les Etats-Unis 1776-1815*, *op. cit.*, p. 16.

武蔵大学人文学会雑誌 第57巻第1号

Delpech Arroy			<i>Saint-Louis de la Concorde</i>	グアドループ (ラマンタン)	1786年11月4日
Ducasse	Louis	海軍船長		マルティニク	1749年11月12日
Dufourg	Xavier		<i>Les Vingt-Un</i>	フランス島 (ポール＝ルイ)	1791年7月31日 1791年9月4日
Dufourg				サン＝ドマング	1796年3月12日
Dufourg				フランス島	1796年4月12日
Dugnoy			<i>Parfaite Union & Tendre Fraternité réunie</i>	マルティニク	1798年6月10日
Duloste			<i>Frères discrets</i>	サン＝ドマング (レ・ケ)	1790年12月7日
Duplan			<i>Amis choisis et discrets</i>	サン＝ドマング (ワナマント)	1789年7月9日
Dupui			<i>Vérité</i>	サン＝ドマング (カップ＝フランセ)	1785年10月2日
Du Temple			<i>Harmonie</i>	サン＝ドマング (カップ＝フランセ)	1765年5月7日
Ferrie	Jean		<i>Nouvelle Alliance</i>	サン＝ドマング	1797年6月10日
Goure				マルティニク	1749年12月11日 1749年12月16日
Grizac (Grissac)			<i>Les Vingt-Un</i>	フランス島	1793年3月26日 1793年6月23日
Jourchaut				グアドループ	1764年7月24日
Lamolere				サン＝ドマング (カップ＝フランセ)	1796年6月24日
Lapeyre				サン＝ドマング (カップ＝フランセ)	1751年8月3日
Mandavy	Raymond	船長		グアドループ (バス＝テール)	1786年2月23日
Mayran			<i>Anglaise n°47</i>	サン＝ドマング (ボルト＝フランス)	1791年5月31日
Molere (Molaire)				サン＝ドマング (カップ＝フランセ)	1796年3月17日、 4月12日、5月21日、 6月21日
Mondolle	Hyacinthe		<i>Triple Espérance</i>	フランス島 (ポール＝ルイ)	1799年4月19日 1799年6月30日
Morel			<i>Réunion des Élus</i>	サン＝ドマング (カップ＝フランセ)	1760年7月19日 1760年7月22日
Renaut				サン＝ドマング (レオガン)	1781年12月1日
Rescaniere	Pierre		<i>Vérité</i>	サン＝ドマング (カップ＝フランセ)	1797年6月10日
Reynau			<i>Amitié indissoluble</i>	サン＝ドマング (レオガン)	1788年9月28日
Roche				サン＝ドマング	1788年11月9日
Roussillon				ルイジアナ	1758年2月28日
Roussillon				ルイジアナ	1760年4月1日
Roy			<i>Vraie Lumière</i>	サン＝クリストフ	1796年3月2日

18 世紀フランス・フリーメイソン団の植民地ネットワークーボルドーの事例から― 田瀬 望

Sallenave			<i>Saint-Louis de la Concorde</i>	グアドループ (ラマンタン)	1796 年 12 月 22 日
Servierre		船長	<i>Choix des Hommes</i>	サン＝ドマング (ジャクメル)	1799 年 4 月 22 日
Thou			<i>Parfaite Union</i>	マルティニク (サン＝ピエール)	1784 年 6 月 15 日
Van der Fleyden	David			ニューイングランド	1766 年 9 月 16 日
Voisin	Étienne		<i>Parfaite Union</i>	マルティニク (サン＝ピエール)	1750 年 9 月 12 日

